

黒岩祐治

明日を語るふ

1999 9/2 ~ 9/22

児童虐待問題  
心の問題

# 目次

ある判決 .....	5
投稿日 1999年9月2日(木)10時48分	
投稿者 SLT [cache.farm.gol.net]	
家庭内での虐待 .....	5
投稿日 1999年9月2日(木)15時53分	
投稿者 赤沼侃史 [G17030.dion.ne.jp]	
児童虐待について .....	6
投稿日 1999年9月2日(木)19時02分	
投稿者 安井 清孝 [117.pool7.tokyo.att.ne.jp]	
日本における児童虐待について .....	6
投稿日 1999年9月2日(木)21時16分	
投稿者 misato [p8493a9.mta6.ap.so-net.ne.jp]	
言ったことのないことですが .....	7
投稿日 1999年9月3日(金)08時44分	
投稿者 赤沼侃史 [G8082.dion.ne.jp]	
RE：誰も今までいったことのないことですが .....	8
投稿日 1999年9月4日(土)07時41分	
投稿者 安井 清孝 [80.pool3.tokyo.att.ne.jp]	
ちょっと分かり難いかもしれません。 .....	8
投稿日 1999年9月5日(日)08時15分	
投稿者 赤沼侃史 [B141029.dion.ne.jp]	
RE：ちょっと分かり難いかもしれません。 .....	9
投稿日 1999年9月5日(日)17時14分	
投稿者 安井 清孝 [128.pool7.tokyo.att.ne.jp]	
雑感後記 .....	9
投稿日 1999年9月6日(月)07時26分	
投稿者 SLT [cache.farm.gol.net]	
ちょっとお聞きしたいのですが .....	10
投稿日 1999年9月10日(金)08時10分	
投稿者 田門 [86.pool0.nishi.tokyo.att.ne.jp]	
きれるとは .....	10
投稿日 1999年9月10日(金)11時39分	
投稿者 赤沼侃史 [E142078.dion.ne.jp]	

たいへん興味深い .....	11
投稿日 1999年9月12日(日)08時00分	
投稿者 田門 [145.pool0.nishitokyo.att.ne.jp]	
脳は大きく分けると脳幹、大脳辺縁系、大脳新皮質です ...	11
投稿日 1999年9月12日(日)10時05分	
投稿者 赤沼侃史 [G17181.dion.ne.jp]	
狂人と常人の境とは? .....	12
投稿日 1999年9月13日(月)01時12分	
投稿者 田門 [10.pool0.nishitokyo.att.ne.jp]	
田門さんへのお答え .....	13
1999年9月13日(月)08時48分	
投稿者 田門さんへのお答え [G18039.dion.ne.jp]	
責任能力の件は? .....	14
投稿日 1999年9月17日(金)16時43分	
投稿者 ナカニシ [ppp50121.netwave.or.jp]	
ストレス受ける側の変化 .....	16
投稿日 1999年9月18日(土)15時46分	
投稿者 吉岡 [kasm1DS32.iba.mesh.ad.jp]	
満ち足りた時代の危険性 .....	17
投稿日 1999年9月18日(土)23時44分	
投稿者 赤沼侃史 [E172167.dion.ne.jp]	
遺族の立場 .....	18
投稿日 1999年9月19日(日)12時30分	
投稿者 田門 [63.pool0.nishitokyo.att.ne.jp]	
ストレスですか .....	19
投稿日 1999年9月20日(月)05時10分	
投稿者 田門 [11.pool0.nishitokyo.att.ne.jp]	
克服できない恐怖は与えてはならない .....	20
投稿日 1999年9月20日(月)08時14分	
投稿者 赤沼侃史 [G22098.dion.ne.jp]	
御質問の答えを忘れました。 .....	21
投稿日 1999年9月20日(月)14時36分	
投稿者 赤沼侃史 [G19165.dion.ne.jp]	
母親の役割 .....	22
投稿日 1999年9月20日(月)16時59分	
投稿者 カヲル [kasm1DS26.iba.mesh.ad.jp]	

**母親を動物に学ぶと** ..... 22

投稿日 1999年9月22日(水)09時07分

投稿者 赤沼侃史 [G15158.dion.ne.jp]

**安全の意味とは。。** ..... 23

投稿日 1999年9月22日(水)12時30分

投稿者 カヲル [kasm1DS11.iba.mesh.ad.jp]

**カヲルさんへの返事です。** ..... 24

投稿日 1999年9月22日(水)16時05分

投稿者 赤沼侃史 [E140164.dion.ne.jp]

**あくまで経験上ですが。** ..... 25

投稿日 1999年9月22日(水)18時12分

投稿者 カヲル [kasm1DS08.iba.mesh.ad.jp]

**続けます。** ..... 25

投稿日 1999年9月22日(水)19時53分

投稿者 赤沼侃史 [G13020.dion.ne.jp]

## ある判決

投稿日 1999年9月2日(木)10時48分

投稿者 SLT [cache.farm.gol.net]

おはようございます。

田門さん、お返事ありがとうございました。あなたの考えがわかりました。私の方にもいくつか誤解のあったようで、その認識のギャップが埋められてほっとしています。

そこで、私の方からも今後何か礼に失することがありましたら、ぜひ遠慮なく指摘していただきたいと思っています。決して人ごとではありませんので。

これからもよろしくお願いします。

さて、今日は[ある判決](#)について私なりの雑感を書きます。以下はアメリカ・カリフォルニア州最高裁判所であった、[幼児虐待](#)の法律の適用に関する判決です。「子供に対する性的虐待の罪には、時効を適用しない」と定めた同州法の合憲性が争われていた裁判で、同裁判所は31日までに、「犯罪発生後に法律で時効期間を変更することは、憲法の定めた事後法の禁止（実行のときに適法だった行為につき、その後に定めた法律で刑事責任を問うことを禁止する原則・筆者注）にあたらぬ」とする判断を示した。表決は4対3

法律制定前に時効が成立した犯罪でもこの法律により罪を問うことが可能になる。」以上読売新聞9月1日夕刊社会面より、筆者抜粋）

私は、重い気持ちになったのです。事後法の禁止とは、近代初期に権力の濫用を防ぐために考えられた法の大原則です。それを変更してまで罰しなければいけないほど、アメリカの児童虐待は深刻なのでしょう。普通、こういった方の基本システムに関しての変更は、どの国の裁判所も消極的な判断をするものだけに、ちょっとしたショックでした。この判決に関する御意見募集しています。それでは、失礼します。

追伸 前回、前々回と大変読みにくい文章だったことおわびします。

## 家庭内での虐待

投稿日 1999年9月2日(木)15時53分

投稿者 赤沼侃史 [G17030.dion.ne.jp]

8月31日、9月1日、2日と[朝日新聞](#)朝刊家庭欄に、「わが子を傷つけないで」のタイトルで家庭内の虐待についての連載があった。その内容は既にアメリカで言われていることであり、特に目新しい物は無かった。ただ、その中で、1日の記事、その中で展開された論理、子供の時に親から心の傷を受けた子供が親になって子供に虐待するというものは、正しくないと思われる。確かに子供を殺してしまったような例には、その親が子供の時にその親から虐待された物が多い。

しかし子供の時親から虐待されて育った人は多い。その内で大人になって自分の子供を虐待するような場合はどれだけあるだろうか？親から虐待されて育ったから、大人になって子供に虐待をするという論理は必ずしも成立しないと思う。それをまことしやかにアメリカからの受け売りで述べているのは、何とも貧弱である。

家庭内虐待で「親子の分離」にも触れられている。親が子供を虐待する。それを防ぐた

めに子供を親から引き離す。一見正しい論理のようであるが、果たしてそうだろうか？  
そこで考えなくてはならないことは、子供は、特に小さな子供は母親から離されるとそれだけで不適応行動を示すようになってしまうことである。この記事の中ではこのような子供の行動は親から受けた心の傷だと述べている。本当は母親から離されたための行動であることに気づくべきであろう。

## 児童虐待について

投稿日 1999年9月2日(木)19時02分

投稿者 安井 清孝 [117.pool7.tokyo.att.ne.jp]

児童虐待についてですが、アメリカの現状はわかりませんが、日本での現状について、専門化は相当な危機感をもっています。私は専門化ではありませんが医療従事者です。まず、「母子分離」についてですが、そのことによる影響よりも、現場では「生命の危機」が優先される状況にあります。

すなわち、虐待により死に至らないまでも、全身打撲、全身火傷などにより重症化してから表面化されるケースが少なくないということです。家庭内で起こるため、児童虐待は表面化されにくいという性質があります。重症化や死んでしまったからでは遅い、悠長なことはいってられないというのが母子分離を行う理由です。

子どものころに虐待を受けた人が、同じことを繰り返すというのは、もちろんすべてのケースがそうなるわけではありません。統計を取ってみると、どうもその傾向があるということです。「アダルト・チルドレン(AD)」という概念がありますが、元々ADというのはアルコール中毒に育てられた子どもが、同じようにアルコール中毒になってしまう傾向にあるというところから端を発しています。子どもの頃に受けた影響から、大人になって問題行動を起こしてしまうという傾向が重要視されています。

日本の現状がアメリカを追いかけているとすれば、アメリカの現状は質的にも量的にも凄まじいところが容易に想像できます。日本の児童虐待の現状は以下の本に詳しく書かれています。

「見えなかった死・子どもの虐待データブック」

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち編・キャプナ出版・1998

I S B N 4-947645-23-7

## 日本における児童虐待について

投稿日 1999年9月2日(木)21時16分

投稿者 misato [p8493a9.mta6.ap.so-net.ne.jp]

日本における児童虐待の現状について、参考になるHPがあります。

- 1、子どもの虐待防止センター <http://www.ccap.or.jp/index.html>
- 2、子どもの虐待の定義について <http://www.ccap.or.jp/abuse/teigi.htm>
- 3、子ども虐待 家族間暴力の現場から  
<http://www.saitama-np.co.jp/main/tokusyu/gyakutai/gyakutai2.htm>
- 4、家族機能研究所 <http://www.iff.gr.jp/>

特に、上記「3」のHPを観ていただくと、どのような虐待が存在するのか知っていただけたと思います。子どもが母親から離されることによって不適応行動を示すことは知っていますが、すぐにでも親から引き離さなければ、こころの成長のみならず「命」さえも奪われかねない状況の子どもが存在します。

下記の「見えなかった死」を読んだことがあります。私は今まで虐待を受けたことも虐待したこともありませんが、これを読んで「決して無関係な問題ではない」と痛感しました。日本における児童虐待についてまず知るために、私の一番のお薦めはこの本です。

## 言ったことのないことですが

投稿日 1999年9月3日(金)08時44分

投稿者 赤沼侃史 [G8082.dion.ne.jp]

私のMSGにRESがあったことをうれしく思います。それだけ小児の虐待問題に皆様の関心があることがわかります。私も数多くの小児の虐待の解決に関与してきました。そして朝日新聞の記事、それから misaro さんの RES の内容もよく分かります。

ただし、医者としてもっと当事者間の心の中に踏み込んで考えたとき、分析したとき、一般的に言われていないことに気づきました。それは父親からの虐待、母親からの虐待ともに言えることですが、子供への虐待を行っている瞬間はどうも、いつもとは全く違う心で子供に対して虐待を加えていると言うことです。

これは私が経験した範囲ですので、普遍化して言うことはできません。特に私の場合、母親の子供への虐待の場合が大半ですので、母親からの虐待に限って話を進めますと、母親は子供を虐待しようとして子供を虐待した場合を、私は経験していません。全てはっ気づいたときには既に子供を虐待していたようです。

つまり、自分の中に別な自分が居て、それが子供への虐待を行っているようです。勿論親が子供に虐待を加えて居るときには子供を母親から離す必要があります。しかし虐待を加えていないときの母親は本当に優しい、母親なのです。子供の心の成長には母親の存在が欠かせません。少なくとも母親から子供を隔離するには、100%母親の代役を出来る人が必要です。それがない限り、子供を母親から隔離しても、出来るだけ早く母親の元へ子供を戻す必要があります。それは猿の実験で証明されています。

では何が母親の中の別の母親が子供の虐待に走らすのか、それは私の分析では母親を苦しみに追い込む刺激が、いわゆるストレスが、母親の中の別の母親を目覚めさせて子供への虐待に走らせています。この事実はあくまでも私の経験の範囲です。それ故に、母親の子供への虐待を防ぐには、母親と子供とを、その様な母親を子供への虐待に走らす刺激から隔離してあげることが大切だと考えて行動をしています。現実に私の経験の範囲では十分な成果を得られています。繰り返しますが、あくまでも私の数少ない経験の範囲です。反論はいくらでもあるでしょう。しかし、私の経験は新たな見方をこの問題に投げかけると信じています。

## RE : 誰も今までいったことのないことですが

投稿日 1999年9月4日(土)07時41分

投稿者 安井 清孝 [80.pool3.tokyo.att.ne.jp]

興味深く拝見させていただきました。虐待する母親が、「自分の中に別の自分がいて」という多重人格的な精神状態にあるというのはうなずけます。虐待を受けて育った人が多重人格になりやすいというのは、すでに言われていることですよね。虐待されている自分を隠すために、新たな人格を創り出すことによって、虐待されているということを隠蔽

ようとする精神的機構でしたよね。

「母親を苦しみに追い込む刺激が、いわゆるストレスが、母親の中の別の母親を目覚めさせて子供への虐待に走らせている」ということですが、その刺激とはいったいなんなのでしょうか。まさに子育てそのものが刺激やストレスになっていると思われませんが、それ以上のストレスが存在するのでしょうか。

赤沼さんの施設では、非常に難しい虐待する母親（もしくは多重人格者？）の治療に関して十分な成果を得ているとのことですが、医学的興味として、具体的にどのような治療を行っているのか知りたいところです。

## ちょっと分かり難いかもしれません。

投稿日 1999年9月5日(日)08時15分

投稿者 赤沼侃史 [B141029.dion.ne.jp]

安井さんのMSGにRESをさせていただきます。最初に、対応法を述べさせていただきます。

それは共感（同情ではない）を中心とした、ごく当たり前のカウンセリングです。他の人のカウンセリングと違う所は対応が無料であること、カウンセリングに回数や時間の制限をしないことです。その内容は心の構造を考えてカウンセリングをしていることです。なぜ無料かということ、料金を取ると、カウンセラーが結果を急ぐこと、クライアントの希望に添う答えを出さなくては成らないことです。

小児虐待を含めてこの種の問題の答えは、カウンセラーやクライアントの意識しないところにあることが多いからです。時間に制限を設けないことは説明はいらないと思います。

ただ、この方法ですと、現実には人に隠れて虐待をしたり、虐待をしていると認識していない人には、用いることはできません。しかし私は元来は外科系の医師ですから、子供が怪我をしてきたとき、それが単なる事故か虐待かを区別することは難しいことはありません。虐待だと判断したときには、それとなく診療の中で母親との会話を続け、母親との信頼関係を作ります。それがカウンセリングのスタートとなります。

ここで今までの私の発言と矛盾したことを申し上げます。私はこの小児虐待を解決することが出来ません。

母親が解決しようと問題意識を持って私に食らいついてきたとき、私のカウンセリングが始まり、効果をもたらしています。その様な意味で万能な方法でもありません。誰でも出来る方法でもありません。

カウンセリングで生計を立てている人には無理な方法です。しかしそこで持ちりている方法論に、問題解決の大切な答えが潜んでいると考えています。次に心の構造についてですが、これはまだ認められた物ではありません。私が私の得意とする登校拒否を中心とした小児の問題、青少年問題に関係する学会で述べてきている物です。まだ私に賛同する人は出てきていません。

かいつまんでお話ししますと、人間の心は脳の中にあることはもう否定する人は居ないと思います。その脳は**大脳新皮質**と**大脳辺縁系**とに分かれています。**思考や過去の記憶**は**大脳新皮質**の中にあり、**感情や本能**は**大脳辺縁系**にあることは脳神経を研究している人たちは既に認めていることなのですが、心理学や精神医学を行っている人はそのことに関心を示していません。大人は普段**大脳新皮質**で**行動**を決定しています。**大脳辺縁系**は大脳新皮質の調節を受けて**感情面の反応**を担当しています。ところがその人に大きな恐怖を与えるような**刺激**が来ますと、**大脳辺縁系**は**暴走**を初めて思わぬ行動をとることになります。これが**二重人格の仕組み**です。

つまり、小児虐待の一部(私の経験の範囲)や、いわゆる切れると言う状態、パニックなどは、この**大脳辺縁系の暴走**のために生じていると考えられます。この事実を考慮して、母親の小児虐待を治そうとするのではなく(大脳辺縁系の反応の仕方を正す方法は不可能に近い)ため。そして今の色々な心の問題の解決はこの不可能に近い感情、物の感じ方を正そうとしている)大脳辺縁系が暴走する刺激から母親を守る方法を考えながら、カウンセリングを進めて、母親が小児虐待を生じるようなストレスから、逃れられるようにすれば、母親は普通の子育てが出来るという事実を絶えず念頭に置いて対応しています。

## RE : ちょっと分かり難いかもしれません。

投稿日 1999年9月5日(日)17時14分

投稿者 安井 清孝 [128.pool7.tokyo.att.ne.jp]

詳しい説明をありがとうございます。この種の問題は個別性が大きいでしょうし、単純に回答することは難しいものと思います。お忙しいなかのRESに感謝します。今後も悩める親と児童の治療を頑張って続けてください。1人でも多くの患者さんが、この種の問題から解放されることを願っています。

## 雑感後記

投稿日 1999年9月6日(月)07時26分

投稿者 SLT [cache.farm.gol.net]

先週の水曜に、**児童虐待**についての**投稿を募集**したところたくさんの御意見をいただきありがとうございました。この掲示板において、活発な討論が行われた模様で興味深く拝見させて頂きました。

私は将来弁護士を目指して勉強しているものですが、普段なかなかこのような御意見を伺う機会がなく、また、児童虐待に対し、法律家として将来どのような方法を採ればよいのかという素朴な疑問から前回掲示させて頂きました。今後の勉強の貴重な参

考になるものと考えております。どうもありがとうございました。末筆ながら、皆様のご活躍をお祈りしています。それでは、失礼します。

## ちょっとお聞きしたいのですが

投稿日 1999年9月10日(金)08時10分

投稿者 田門 [86.pool0.nishitokyo.att.ne.jp]

黒岩さん、がんばって下さい、今日雑誌買って読んでみます。

さて、ちょっと皆さんに聞いてみたい事があるのですが。先日通り魔事件が起きました。いつもは普通の人だとか(?)、何かがきっかけで**キレた**といひます。**キレル**というのはなにかがきっかけで**理性がなくなる事**だと思ひ、理性が無くなったというのは、常人から見れば**狂人と言える**のではないのでしょうか。

以前おっしゃってましたが、犯罪を犯す時はみな普通の精神状態ではなくなると思ひます。ならば皆、こういう事件の者には精神鑑定をしなくてはいけなくなります。いかなる理由でも**人殺しは犯罪**でしょう、また、僕はそういう事件が起こるたびに正義面して社会が悪いなどという知識人が理解できません。今の**精神障害の免罪制**は、はるか昔に作られたもので、時代背景がちがうと感じます。

どうなのでしょう、本当に今の日本に**精神障害という免罪性**は必要なのでしょうか？僕には**悪用されている**だけにしか思えません。

## きれるとは

投稿日 1999年9月10日(金)11時39分

投稿者 赤沼侃史 [E142078.dion.ne.jp]

いわゆる「**きれる**」と言う状態に関して、心理学的にいろいろとされています。それらは現象面の分析であり、それらは本を見ていただけると良いと思ひます。私は**脳科学的に切れることを説明**してみたいと思ひます。

心には**意識に登る心**と**潜在意識の情動**とがあります。意識に登る心は前頭葉にあります。情動は**大脳辺縁系**にあります。これらは意識が情動を調節する形で存在しています。間違えては成らないことは、感情とは潜在意識の情動を意識が感じ取って、過去の経験から判断した物です。情動が意識に登らないことは良くあることです。二重人格の原因です。

**きれる**とはこの**情動が暴走**をしたときの状態です。情動が全ての行動を決めていますから、それまでの知識として身につけた物とは全く違う行動をとることになります。記憶にも残らないことが多いのです。この**情動の爆発**は良い意味では芸術などで見られます。岡本太郎の言葉を思い出す人も多いかと思ひます。**悪い意味での爆発**が今回の事件や神戸の連続通り魔事件です。この方面の一般向けの本ほとんどありません。

EQこころの知能指数、ダニエル・ゴールマン、講談社がとてわかりやすいかと思ひます。

## たいへん興味深い

投稿日 1999年9月12日(日)08時00分

投稿者 田門 [145.pool10.nishitokyo.att.ne.jp]

赤沼さん、ありがとうございます。僕の全く考えてない方向（視点）ゆえに、大変興味深いものでした。僕は頭が悪いので少し確認させて下さい。

意識に登る心というのは今まで生きてきた空間の中で養った常識、理性ですね。情動というのは人間の本能的な意図、願望ですね。では、もう一步踏み込んで聞きたいです。潜在意識の情動の方を意識に登る心と考えている人っていませんか？僕はこれが狂人だと思いますが（少なくとも法治国家の上では）。

## 脳は大きく分けると脳幹、大脳辺縁系、大脳新皮質です

投稿日 1999年9月12日(日)10時05分

投稿者 赤沼侃史 [G17181.dion.ne.jp]

心が脳の中にあることは、脳死の事を考えれば理解できると思います。その脳も、心と言う意味から言うと、心を表現したり、命そのものである、脳幹や小脳と、生命の安全や維持に関係した私で言う情動の心の大脳辺縁系と、人間を他の動物と著しく際だたせている、知識思考記憶に関する、大脳新皮質に分かれます。ただ、大脳新皮質の構造上では区別できませんが、その機能として、例えば考えたり、思い出したりする意識そのものの機能の思考の脳と、普段は意識に登らないが、意識登らせようとする登らせることができる、例えば人に会うとあいさつするなどの、意識的なことを繰り返すと無意識に出来るようになる手続きの脳に分けることができます。

大脳新皮質 - -	思考の脳（顕在意識）	手続きの脳（潜在意識）
大脳辺縁系 - -	本能、情動の脳（潜在意識）	脳幹 命そのものの脳

大脳辺縁系の本能や情動は、直接的には意識に登りません。例えばのどがわかいことを考えて下さい。これは大脳辺縁系からののどが渴いたという情報が思考の脳へ伝わるわけではありません。大脳辺縁系からののどが渴いたという情報は、口の中が渴くなどの体内に表現があり、それを知覚して大脳新皮質が過去の記憶と照らし合わせてのどが渴いていると判断（感情）します。涙などは、うれしくて泣いているのか悲しくて泣いているのか分からないことがあります。このように情動が意識で判断されて感情として認識されるわけですが、意識の脳が機能しないときには、自分が何をしようか、自分が何をしたのかまったく関係なく行動をしてしまうことになります。勿論けがで大脳新皮質の機能障害を来した人がまるでロボットのような行動をしたことから、このようなことが分かってきたわけです。

そこでいわゆる「きれる」と言う状態です。普通の大人では思考の脳が本能や情動を調節して生活しています。ところが環境によっては、思考の脳は休んで、本能や情動の脳が働いている状態は結構あるものです。それがきれると言う状態になると情動の脳が思考の脳の機能をストップさせてしまい、悪い意味での情動の脳と手続きの脳だけであるゆる行動をしてしまいます。その行動は動物的です。多くの場合強いストレスに対する反応の事が多いので、その行動は対象に対して破壊的です。思考としての記憶にも残り

ません。

現在の心理学や精神医学はフロイト、ユングの流れを汲んだ、人間の言葉を中心とした心理現象の分析です。そこには客観性がありません。仮説の体系の集積です。客観的に脳の科学を心に応用するとこのような論理の展開が出来ます。

そこでご質問のことですが、普通の人ではほとんどの情動は意識で正しく判断されて感情として認識されます。そこで感情と情動とを区別して考えない人が大半ですし、現在の心理学も感情と情動を区別していないようです。少しは潜在意識を考えていますが、脳に根ざしていないために間違った物になっています。繰り返しますが、普通の人では感情と情動を同じように考えても間違いはありません。

ところが特殊な状態、その内でもここでの話題である、強いストレスにさらされた状態では、感情と情動と意識の関係をしっかり区別して考えないと、正しい分析が出来ません。いわゆる狂人とはストレスにさらされた人です。そのストレスも、ストレスそのもののもありますが、ストレスを生じる物の概念でストレスの反応を起こしています。このことは今の精神医学では認められていませんが、脳科学から考えると間違いはないと思います。

すなわち狂人と言われる人にとっての特殊な環境下では普通の人にとっては何ともない刺激が、その狂人にとってはストレスであり、またはストレスを予想させる刺激であるとき、その狂人の情動の脳が暴走を始めてしまうのです。当然犯罪や、罪悪感はありません。出てくるのはその後の周りの人の対応で、思考の脳が正常に働きだした時のことです。

## 狂人と常人の境とは？

投稿日 1999年9月13日(月)01時12分

投稿者 田門 [10.pool@nishi.tokyo.att.ne.jp]

なるほど、また視野が広がりました。僕は頭が悪いので理解できない個所がありましたので質問させて下さい。

つまり、常人も狂人もキレるという行為自体は外部からのストレスによって思考の脳が停止した状態であり、互いに共通している。相違点はストレスの受け止め方だ、という事ですね。次に「ストレスそのもののもありますが、ストレスを生じる物の概念でストレスの反応を起こしています」とありますが、いまいちここの**ストレス**がよく分かりません。詳しく説明して下さい。

また、僕は本能、情動の脳が著しく強い人間がいると思います。常人は思考の脳を一番に置き、個人のエゴの汜乱本能、情動の脳の暴走を押さえる為に倫理があり、法律があり、それが為に正常な国家（法治国家か）があるわけですよ。僕個人では本能、情動の脳を主体とした思想の人物を狂人かどうか断定はできません、

しかし一つの思考の脳を原点とした国家システムから見ればそれを狂人と見る事ができるとおもいます（これは宗教にも言えると思いますが）。赤沼さんのおっしゃる狂人とはキレる狂人ですね。これは科学的に見た狂人の、ほぼ間違いの無い意見であると思えます。いかがでしょうか、狂人にはもう一つ、社会学的(?)に見た狂人がいるのではないのでしょうか。（もし、赤沼さんが「そんなんわかつとるわい、お前の為に脳科学的に語ったんやろが」とお思いでしたらお許し下さい、一応なんらかの考えの基に言ったものですので）

## 田門さんへのお答え

999年9月13日(月)08時48分

投稿者 田門さんへのお答え [G18039.dion.ne.jp]

田門さんのMSGにお答えします。私の説明が悪かったのですが、**切れる状態**は全ての人で**共通**です。ひょっとしたら人間に近い動物全てでも共通だろうと思います。**感じる脳**はほぼ**全てのほ乳類**にあります。その機能はほぼ同じであると、今までの所考えられています。

そこでいわゆる**狂人**ですが、**医学**では**精神分裂病**を指すのではないかと思います。この精神分裂病の原因は未だに分かっていません。その診断はアメリカの診断基準に則った医師の主観的な判断であり、客観的に分裂病だと決定できる物は何もありません。医師の中にも分裂病を含めて精神病は存在しないのではないかと言う人もいます。

つまり科学的には精神分裂病は証明できない、医師の判断によるいくつかの症状（症候群）を示す人を言います。**社会的な狂人**については、私にはわかりません。

**ストレス**とは何でしょうか？多くの人にとって、分かっているがその実よく分からない物でしょう。辞書を引いても分かりがたいと思います。一般的には人間や生物、非生物についてそれらを痛めつけるような、死や破壊に繋がるような外部からの力を含めて刺激を言っているようです。心に関しては、嫌な刺激、生物がそれから逃げ出そうとする刺激を**ストレス**と呼びたいと思います。ここでは**嫌悪刺激**と呼んで起きます。

人間の社会生活は思考の脳と手続き（習慣）の脳の働きで成り立っています。その社会生活の中で、個の安全や保全に関することからは情動の脳が働いていますが、意識には登りません。うまく調和して脳が働いて全く意識しないで生活が可能です。その様な個に上記の**ストレス**が加わったとき、思考の脳で、情動の脳で、個はどのような行動が可能でしょうか？まず逃げたり、回避したりするでしょう。それが出来ないときには**ストレス**の原因を無くそうと、破壊しようとするでしょう。人間ではそれ以外に意識の脳が情動の脳を調節して、**ストレス**を**ストレス**以外の刺激に転換することが出来ます。

ただし、これは子供では出来ません。また、大人でも余力のない人はできません。これらの子供や余力のない人について、上記の**ストレス**に対する反応が表現できないときには、**ストレス**を受けると動けなくなります。それが不安状態と動物で見られる「**すくみ**」です。その**すくみ**は人間では**鬱状態**だと思われれます。この状態では、知覚や意識の狭窄と狭められた知覚や意識の過敏状態を生じます。脳内ではノルアドレナリン作動性のシナプスでノルアドレナリンの枯渇が生じています。セロトニン作動性のシナプスでの異常（詳しいことをはっきりと書いた論文を私はまだ見つけていませんが、最近のSSRIという薬の効果などから、矢張りシナプス間隙でのセロトニンの枯渇、再吸収の促進、または破壊が進んでいる）があります。

動物では**すくみ**の状態しかわかっていません。それ以外の人間の精神疾患に相当する状態のモデルは見つかっていませんが、人間では心因性の聾、啞、盲があります。それらは情動の脳がそれらの機能を止めた状態です。

**切れる**が思考の脳の機能を止めたと同じように、脳内のある段階で、それらの機能を止めています。盲、聾にかんしては脳の感覚野で近く情報が処理されていることは客観的に（fMRIなどで）確認されていますが、思考の脳で認識されていません。これと同じ事があらゆる刺激に対して生じたとき、**自閉症**という状態だと私は想像しています。

個の自閉状態に既に獲得していた**ストレス**のイメージが絶えず脳内で情動の脳を刺激

している状態が**分裂病**であろうと考えています。外からの刺激を遮断して自分の脳内に自分独特の世界を作り、それに基づいて意識に登らない行動を続ける、その軽い状態が今回の池袋の通り魔事件だと思います。

いわゆる「**狂人**」とは何らかの刺激（多くは嫌悪刺激）で外界からの刺激に自分の反応を拒絶して、自分独特の世界を自分の手続きの脳に作り上げてしまっている人、その人の判断は思考の脳でなく、絶えず情動の脳で行われている人を指していると私は分析しています。きれんと言う状態ととても似たメカニズムが働いています。

最後に一言お断りしておきますが、**このように説明している人は医者の中にもいません**。今の心理学、精神医学の知識と異なります。しかし現在まで得られた脳科学の知識を組み立てるとこのように結論づけられます。現在までまだ、機能の分からない脳内の神経核はいくつかあります。それらの機能が分かると、私のこの解釈は否定されるかも知れません。ただし、現在までの脳科学から得られた知識は十分に再現性があり、私が行った限りの対応の結果がこれらの解釈の正当性を証明している可能性を示しています。例えば鬱やパニック、登校拒否、自律神経失調などはこの考え方に基づいて対応すれば、薬を使わなくても克服できています。

## 責任能力の件は？

投稿日 1999年9月17日(金)16時43分

投稿者 ナカニシ [ppp50121.netwave.or.jp]

いつもROMをしております。大変勉強になります。

田門さんと赤沼先生との対談は、脳の科学と精神の病理の関連を探ろうとする大変意欲的な試みで、知的好奇心を大いに刺激されます。赤沼先生には是非今後とも御研究を継続されて、精神の病いで苦しんでいる患者さんの苦しみを取り除くべく、御尽力いただきたいと思います。

さて、意義深いお話が続いておりますところに横から茶々を入れるようで大変申し訳ないのですが、田門さんが9月10日の投稿でご指摘になった「**現代の日本では、犯罪者を精神障害で免罪するのは時代遅れだ。**」との**問題提起**については、どうなりましたでしょうか。私としては判例・通説の考え方で良いのではないかと、思い、いろいろなご意見をお聞き致したく思っていたのですが、その後投稿がないようですので、皆さんのお考えをお聞きしたいのですが。

(以下、無味乾燥な法律論と、私見)

判例・通説のとるところでは、刑罰の本質は違法な行為を行った者に対する道義的非難であり、行為者を非難するためには、行為者が、犯行当時、非難可能な状態にあることが必要だとされています。そして非難可能と言うためには、行為者が、「これから自分がやろうとしていることは、違法で許されないことなのだ」ということ(「社会倫理規範」という)を理解・判断し、その判断に従って自己の行動を制御できるだけの精神的能力があったにもかかわらず、あえて違法行為を行ったことが必要となります。また、犯罪成立に責任能力が必要とされるのは、精神の障害で是非弁別・行動制御能力を欠いていた(または著しく弱くなっていた)場合(責任無能力、限定責任能力)には、社会倫理規範の意味を理解できないので、これを非難し得ない(または非難の程度が弱まる)ことになる、そこでこのような場合は刑事責任を減免する、というわけです。

なにぶん浅学非才のため、上記の判例・通説の主旨につき、誤解している点があるかもしれませんが、「非難可能性」を犯罪成立の要素とすることによって、犯罪とは縁のない一般人にとっては「非難に値するような行為をしなければ処罰されることはないのだ」との安心感を与え、行動の自由を保障することになります。また犯罪を犯してしまった者にとっては「自分は非難に値する行為をやってしまったのだ」と納得することにより、はじめて、真面目にお務めをして、更正・社会復帰を目指そうとするのではないかと思います。したがって、犯罪の成立要件として非難可能性を検討することは、刑法の機能という点からも、必要不可欠と考えます。そして、責任能力がなければ行為者を非難し得なくなりますので、責任能力もまた検討されるべきと考えるものです。

(揚げ足取りみたいで、申し訳ないですが...)

なお、たいへん僭越ですが、田門さんの9月10日の投稿で、誤解しておられると思われる点を指摘させていただきます。

まず、「いかなる理由でも人殺しは犯罪でしょう」とされていますが例えば正当防衛や緊急避難が成立する場合は、違法性が阻却されますので、犯罪は成立しません。一般的に犯罪とは、「構成要件に該当する違法かつ有責な行為」とされています。つまり、構成要件該当性・違法性・責任という3つのレベルすべてクリアしてはじめて犯罪が成立するわけです。そして上述の非難可能性とか責任能力の問題は責任論の問題で、これを欠く場合は、責任阻却により犯罪不成立となります。

また田門さんは、現行法上、精神に障害があれば自動的に責任無能力となる(のはけしからん)と考えておられるようですが、条文の上ではあくまでも「心神喪失者の...」「心神耗弱者の...」行為が問題となるわけで(刑法39条参照)、精神障害者が当然に免責されるわけではありません。

そして判例・通説によれば、心神喪失・耗弱はあくまでも法律上の概念で、医学的な判断である精神障害とは離れて、法の立場から裁判所が独自にその意味内容を確定していくべきである、とされ、具体的には、心神喪失とは、「精神の障害により事物の是非・善悪を弁別する能力、ないしそれによって行動する能力を欠くこと」とされており、心神耗弱とはこれらの能力が著しく減退した場合を言う、とされています。これらの場合には、行為者が違法な行為をやっても、これを非難できないか、または非難の程度が弱まるからです。

このように精神障害と心神喪失・耗弱は別個の概念ですので、たとえば精神鑑定の結果、精神分裂で心神喪失だったとの意見を鑑定医が出しても、裁判所はこれに拘束されずに、責任能力ありと判断できますし、事実、昭和50年代後半以降、分裂病や覚醒剤中毒で心神喪失・耗弱だったとの鑑定結果にも係わらず、裁判所が犯行当時の病状や動機形成・行為態様を総合的に判断して、責任能力ありと認定する裁判例が現れるようになってきております。(この点、他局の午後のワイドショーでの話ですが、精神科医と称する人物がでてきて、「精神病との鑑定ができれば即無罪」などとコメントしていたのは、理論的にも実務の上からも不正確、もしくは誤りであり、視聴者を誤導するものであって大変残念なことです。)

偉そうなことを長々と書いてしまい、申し訳ありません。まだまだ勉強中の身で、判例の整理などで、思わぬ過誤などありましたら、なにとぞお許しください。ではまた。

# ストレス受ける側の変化

投稿日 1999年9月18日(土)15時46分

投稿者 吉岡 [kasm1DS32.iba.mesh.ad.jp]

田門さんと赤沼さんのやり取りを読ませて頂きました。

赤沼さんのお話が専門的なので理解出来ない所が多かった(私の理解力不足です)のですが、やはりこれからは御説明されていたような、脳のメカニズムを出来るだけ解明して、先日の通り魔事件のような犯罪の防止につながって行けば良いなと感じました。そう簡単なものじゃ無いでしょうけどね。

赤沼さんの御説明のなかで、ストレスが「きれる」状態になる際の引き金になるというお話がありました。「きれる」原因となるストレスをハードルに例えると、最近、そのハードルがえらく低くなり過ぎている様に感じます。(たとえが悪いかな?)

少し古くなりますが、黒磯の中学校での女性教師刺殺事件を記憶されている方も多いと思います。当時、他にもバタフライナイフを使用した傷害事件が多発していました。その際報道機関はしきりに「きれる」という言葉を使い、事件を伝えていました。

田門さんがおっしゃっていた通り、教育評論家と言われる人やコメンテーター達から、やれ今の子供はストレスが溜まっているのだ、縛られているのだ、受験で疲れているのだ、塾で疲れているのだというような内容の発言が聞かれました。

でも、私が思うに、今の時代ほど子供達が甘やかされている時代が、かつてあったでしょうか?体罰は無くなり、(完全にじゃ無いでしょうが)詰め込み教育は緩和され、ゆとりの時間が設けられ、今なお、1クラス30人学級にしるのだ、担任を2人にしては?だの生徒の個性を大事にするのだという様な、子供に迎合する様な話しか聞きません。至れり尽せりです。おそらく、教育の中では、いじめ・暴力というものはいけない物だという事も教えている事でしょう。

しかし、子供達のまわりから暴力的なもの(体罰等)を排除し、ストレスになるようなものは極力与えない様にしてきた結果、かつては、「きれる」原因となるストレスになり得なかったものが、「きれる」原因ストレスに変わってしまったのではないのでしょうか。

ストレスに対する免疫力の低下現象といえると思います。その結果、皮肉な事に、かつて無かった様な暴力が横行し始めました。黒磯の教師刺殺事件も、先日の池袋通り魔殺人事件も、最近多発している幼児虐待も、その流れの延長線上にある様に思えます。

大人達は、この事実をしっかりと考えていかないといけないと思います。今進んでいる方向が本当に子供達の為になっているのか?今の様に子供に迎合して行くだけでは、ますます状況は悪化して行くように思えます。

## 満ち足りた時代の危険性

投稿日 1999年9月18日(土)23時44分

投稿者 赤沼侃史 [E172167.dion.ne.jp]

吉岡さんの意見はポイントをついていると私も思います。される状態になるハードルが低くなっていると言われました。そのハードルのことを閾値と言います。本当にそうなのです。

このストレスに対する閾値を決めているところは**大脳辺縁系の扁桃体**にあると考えられます。現在の所音と光について見つかっています。その神経細胞は大きな音に対してだけ反応していました。つまり閾値が高かったということです。

ところがその閾値より大きな音加わってその神経細胞が反応すると、その後その神経細胞の閾値が少し下がり、前の音より少し弱い音に反応するようになります。その状態で次の強い音来ると閾値がもっと下がってもっと弱い音に反応するようになります。このように大きな音が繰り返し加わると、とても信じられないような小さな音でもその神経細胞は反応して、大きな音と同じように回避行動をとるようにと信号を出すようになります。

これと同じ事が起こっていると考えられます。つまりある子供ではストレスが繰り返すために、ほとんどストレスとは思えないストレスで思わぬ回避行動をとるようになるということになります。

次に依岡さんは**子供達が甘やかされている**実体を指摘されました。これもポイントをついていると思います。

ただし、甘やかされているのではなく十分に満たされていると言う方が正しいでしょう。現在の物質的に満たされて、親の十分な愛情に満たされて育つことの危険性を、私は指摘したいと思います。勿論何不自由なく育ち、親の愛情に満たされていること自体は全く問題がありません。

ところがこれらが無くなったとき、子供達はとても大きな恐怖またはストレスを感じるのです。これを**欲求不満性無報酬**と呼んでいます。なかなか理解できないと思いますが、例えば子供が毎月千円のお小遣いを貰っていたとします。その小遣いが納得できない(欲求不満)理由でもらえなくなった(無報酬)とき、子供はとても大きなストレスを受けると言う意味です。動物実験で証明されています。

子供は生まれ落ちたときから、両親や祖父母の暖かい愛情と身の回りの色々な物に満たされて成長していきます。そして他の子供との関わりが始まったとき、他の大人と関わりが始まったとき、その子供は当然自分のためにあるべき物や愛情を得られなくなることに出くわします。それだけで子供はストレスを感じるのです。そのストレスが解消されれば問題は無いのですが、そのストレスが解消しない内に次の満たされないことによるストレスを受けるという繰り返しが生じると、子供のストレスに対する閾値が低下してしまうことが考えられます。

今の赤ちゃんは、親が一生懸命理想的な子育てをするために、本当に色々な物で愛情で満たされています。それでいて躰という名目で突然物や愛情を与えるのを止めてしまいます。

幼稚園や保育園では、今まで大人を思いのまま？に動かしていたのに、それが出来なくなります。そればかりか今まで経験もしなかった、色々や要求が子供に課せられます。助けてくれていた親がそこにいません。そればかりでなく、早期教育は子供の能力以上の

物を子供に要求します。

それらは全て子供のストレスに対する閾値を下げて、気がついたときには子供は思わぬ性格の持ち主になっていると言うわけです。

以上の理由から吉岡さんの体罰などストレスの原因になる物を与えなかったために閾値が下がったという考え方は、生物学的にありえません。単に頭の体操です。脳の仕組みを考えれば、ストレスを与えれば与えるほどストレスに対する閾値が下がり、より多くの子供が色々な不適応行動を示すこととなります。豊かであるために、子供がストレスに対して弱くなっている、その結果色々な性格の子供が生じている現実をしっかりと見つめる必要があります。

## 遺族の立場

投稿日 1999年9月19日(日)12時30分

投稿者 田門 [63.pool0.nishi.tokyo.att.ne.jp]

赤沼さん、本当にありがとうございました、以下のちょっと書く時の助けにもなりました。

ナカニシさん、返答が遅れてすいません、なにぶん文化祭と体育祭が連続してて多忙でして。僕は法律の専門家でないので細かい所まで一つ一つ言われても、そうですかと言うしかないのので今の刑法は古いのかどうかという点だけで話します。

心神喪失・耗弱というのは失礼な言い方かも知れませんが狂って犯行を犯し自覚が無い事ですね。ここでまず一つ、刑法が作られたのは明治でしたね。明治時代に「きれる」という概念がありましたでしょうか。

現代で大きな社会問題となっているきれるという問題、子どもだけではありません。僕は先日赤沼さんとお話させていただいたのですが、人が「きれる」状態になった時全く罪の意識や自覚等が無くなってしまおうとおっしゃっていました。

この無意識になる状態というのは社会でも事実とされているようです。ならばきれるというのは一種の心神喪失になっていないのでしょうか。

今の現代において衝動的な「キレた」犯行はとても多いです。今の刑法ではこれら全てを精神鑑定にかけなくてはいけなくなると僕は思います。

鑑定医の意見を裁判所が退ける権利を持っていたとしても証拠を絶対とする裁判の場では被告を弁護する絶大な威力となることは否めないでしょうし、必ずしも裁判官が退けるとも限りません。

僕は法律の専門家でないし、なる意欲もありません。だがテレビを見ていて事件が起こるとすぐ精神鑑定とかなんやと持ち込んでいく。

僕が被害者の遺族の立場になったら、こんな刑法もきれた犯罪者も絶対許さないでしょうという考えのもと、また書かせていただきました。

# ストレスですか

投稿日 1999年9月20日(月)05時10分

投稿者 田門 [11.pool0.nishitokyo.att.ne.jp]

吉岡さんと赤沼さんのお話がとても興味深かったので失礼ながら意見させて下さい。  
赤沼さんにはいつも勉強させていただいて感謝しております。そこでまた質問させて下さい。

閾値が下がるのを抑えることが今の子どもは下手になっているのではないのでしょうか。  
早期教育等のストレスは別にしても躰や幼稚園、保育園によるストレスというのは子どもが集団社会（社会システム）の中へ入っていく時の必要ストレスであって、遙か昔からあったものだと考えます。

人間が社会において生きていく時ストレスは必ずついてまわるものであるし、昔に比べてストレス（外圧か）が加わる機会も少なくなっている事は、子どもを叱れない親の増加を見るだけでも明らかです。

以上の事を見ると、昔と今のストレスの残留度の違いは、ストレスの発散度の違いだと考えたのです。そこでお聞きしたいのですが、どうすれば閾値を下げるストレスを発散できるのでしょうか。

どうにもこの辺が難しい。例えば愛情ですが、僕は吉岡さんの愛情も必要だと思うのです。今の子どもはどこまでが許されて、どこまでいったら許されないというボーダーラインが全く無い。意識に昇る心が欠如して衝動だけで動いています。これは親が許されること、だめな事の場合によっては体罰を使ってでも子どもの意識に昇らせなければいけないと思います。

この父権はその時は子どもに多大なるストレスを生じさせると思いますが、教え込まれた事によって後に何かあった時にも衝動に我慢等の柵がおけるものと思います。

しかし現代では甘やかす、優しくするという母権のみがあり、怒る事もせずに柵を作らない。柵を持たない子どもが集団社会の中に入った時、その制約の中に収まるはずがありません（ボーダーを理解していれば制約を逆手に取って限界ぎりぎりをいつも楽しむことも可能なのに）。

この制約は子どもの意識に昇らせた一時の物に比べてものすごい大きなストレスになってしまうでしょう。

一見ストレスを与えている様に見えても長い目で見ればストレスを減らしていると思こともあるでしょうし、その逆もあります。どうにもこの辺は難しいです。

長々と書いて申し訳ありません。僕の文章力、理解力の至らぬせいで、誤解や「これも俺が言っとるやんか」というような失礼な所があるかもしれません。それは堪忍して下さい。

# 克服できない恐怖は与えてはならない

投稿日 1999年9月20日(月)08時14分

投稿者 赤沼侃史 [G22098.dion.ne.jp]

田門さん、私のMSGを理解して頂いて有り難うございました。ただ、一つだけ大きな問題点を抱えたまま、私のMSGを理解なさろうとしています。また、その問題点が私の分析の他のいわゆる専門家と言われる人たちとの違いなのです。その点を今一度繰り返します。

**心は脳**にあります。脳は生物の進化の結果今のような構造になりました。

脳はいくつかの部分に分かれ、それなりの機能をし、互いに調和を持っています。心と言う点から脳を見ると、脳幹、大脳辺縁系、大脳新皮質、と三つに分かれることは以前に申し上げました。この三つはその進化の過程でその機能が確立していて、元来は独立して機能していますが、互いに影響しあって、調和を保っています。

少なくとも大脳新皮質の思考認知追憶習慣、と大脳辺縁系の情動とは元来独立してその機能を発揮しています。

そこで「閾値が下がるのを抑えることが今の子どもは下手になっている」との田門さんのご指摘ですが、「満ち足りた時代の危険性」の中を見ていただきたいのですが、閾値が下がる問題は外から加わるストレスの大きさと間隔です。

子供自身ではどうにもできない問題です。子供が下手かどうか、それは子供が自分の意志でストレスを昇華するかどうかの問題を指摘なさっているとしたら、以下の三つの事実を指摘します。

**一つ**は大脳新皮質は大脳辺縁系で起こっていることを直接知り得ないこと、**二つ**は子供の大脳新皮質は未熟で情動を認識する(感情)ことがほとんど出来ないか下手であること、**三つ**は子供は大脳新皮質で大脳辺縁系を調節できないことが言えます。これを下手だと表現できるのでしたら、田門さんの指摘は正しいと思います。

次に「**必要ストレス**であって、遥か昔からあった」の問題です。ストレスは、克服できる限りでは、有っても構わないと言うのが、脳科学からの答えです。

有っては困るから、逃げ出さなくては成らないから、動物はストレスという見方で捕らえて良い刺激に対する反応を脳の中に作りました。

ストレスに対して対応の仕方を確立したから、自然淘汰にうち勝ってここまで進化しています。大脳辺縁系の量的に多くの部分がストレスに対する反応の仕方を書き込んだ脳の部分だと考えても良いほどです。

ですから、必要なストレスという考え方ははっきりと生物的には間違いです。ただ、克服できる限りにおいては、動物には問題がありません。次に昔からあったの問題です。

しかし、昔と今とは環境が違うと言うことを私が主張しています。昔は今より物質的にも、愛情的にも恵まれていなかった。それが急速な勢いで生活レベルが向上し、少子かで、また大人の知識の増加で、理想的と考えられる子育てを受けて幼稚園、小学校へ入学しています。そこで欲求不満性無報酬の問題が生じます。

ただし、これは子供がストレスに対する閾値の低下を生じる一つの大きな要素であり、全てだとは考えていません。

「昔に比べてストレス(外圧か)が加わる機会も少なくなっている」と言われていますが、昔ほどストレスが多くなると子供達はもっと不適応行動を起こしやすくなるのが、言えます。

ストレスは自分で自分を調節できるようになる大人になって経験するので十分です。子

供のストレスは大人が昇華してあげるのが生物の原則のように、脳の構造から考えられます。動物と比べて人間は本当に欲張りです。子育てにもそれが言えます。動物では親が子供を守り続けます。しかし決して教えることはしません。

しかし人間の多くは子供を教えることに一生懸命です。子供の肉体を守ることに一生懸命ですが、心を守ろうとはしません。

「体罰を使ってでも子どもの意識に昇らせなければいけない」これは人間の心を間違っ  
て解釈しています。子供は情動が意識に登らないし、感情として認識することも経験の不足から出来ないか下手です。それは経験を増やしてあげない限り、不可能なことです。そこで体罰を含めて恐怖を用いた躰が子供にもどのような影響を与えるか考えてみて下さい。恐怖を用いた躰は回避行動です。恐怖のないところでは効果が有りません。

例えば友達をいじめてはいけないと体罰で教えたとします。当然体罰を加える人の前ではいじめは無くなります。

しかし体罰を加える人の居ないところではいじめは行われてしまいます。そればかりでなく体罰が加わるという不安そのものがストレスとして、子供のストレスに対する閾値を下げ続けてしまうことを理解して下さい。

子供にはその恐怖不安が解消できる範囲でしか与えては成らないのです。大人では意識＝大脳新皮質が情動＝大脳辺縁系を調節できるようになりますから、この議論は成立しません。子供が大人になったときも同じです。思春期を越えると子供の行動が変わる原因です。子供と大人と同じようには考えては成らないのです。

「甘やかす、優しくするという母権」動物から学ぶ限りにおいて、母性とは子供を守りその成長を保証するだけです。人間は母性を間違っ  
て解釈しているのではないのでしょうか？子供が求める物を与えるのは母性でしょう。

しかし現代は子供が求めないのに与えていることが問題だと思います。子供の必要で子供に物が与えられているのではなく、親の思いで子供に物が与えられています。それが甘やかしです。子供にとってはお節介です。優しいのは母親の母性そのものでしょう。この種の問題はアメリカのハリーハーロウという人の猿の実験がとても参考になります。心理学書には必ず触れられていますが、詳しくは書かれていません。その実験を一言で表現すると子供は母親の優しい保護の元に、自分で大人になり、自分で社会性を求めていき、優しい母親が無いと、不適応行動を生じ、社会性も生じない事を証明しています。

## 御質問の答えを忘れました。

投稿日 1999年9月20日(月)14時36分

投稿者 赤沼侃史 [G19165.dion.ne.jp]

田門さんの質問に答えていなかったことがありましたので追加を致します。「どうすれば閾値を下げるストレスを発散できるのでしょうか。」これは子供自身にはできません。母親とのスキンシップです。

このことは脳科学では示せませんが、前回言いましたハリーハーロウの猿の代理母の実験が答えになります。

すなわち、子供は母親の胸に抱かれているだけで、それがなされます。昇華できたとき、子供は母親から離れて新たな経験をしに母親から離れていきます。ついでに「意識に昇る心が欠如して衝動だけで動いています。」もとても大切な指摘ですので、それに触れておきます。

子供の行動の大半は衝動的な行動です。周囲の人が許せる行動の範囲です。其れを性格

と言います。大脳辺縁系と大脳新皮質の手続きの脳の反応です。周囲の人が許せない範囲の行動の時不適合行動と呼びます。

子供が理性を働かせて行動するときは大人と子供とが向かい合っていて話し合っているときぐらいです。

それ故に意識に登る心が欠如していることが子供らしいのであり、大人との違いです。其れなのに大人は子供は意識に登る心を持っている、持たなくては成らない、と考えることが、子供の心を知らないことを意味しています。

## 母親の役割

投稿日 1999年9月20日(月)16時59分

投稿者 カヲル [kasm1DS26.iba.mesh.ad.jp]

赤沼さん田門さんのやり取り、興味深く拝見しております。

私は2児の母ですが、子供が1歳なら親も1歳であるというのが私の気持ちです。産まれた子供をどう育てたらいいのか手探りで迷いながら育てています。世間には子育てに関する本が溢れていますが、正直なところ、どれも似たり寄ったりなので今は読みません。実際「正解」もないのかも知れないと思っています。

子育て関連ネットでは「どうしても可愛いと思えない」という声もあります。他人の言う「母性」と自分とのギャップに悩む人もいます。

私が小さいころは体罰もありました。でもそれにはきちんと「理由」が存在したので(私が待っていられず母の仕事中に騒いだとか)自分なりに叩かれた事に対して納得したように思います。

私はキレるとかグレるとかというのは、育て方云々というより「その子自身の持っているもの」次第な気がするんです。どんなに優しい両親であっても、犯罪を犯す子がいれば、逆に母子家庭でろくに面倒を見てもらえなかった子でも立派に育つ事だってあります。もちろんそれが全てではないでしょうけれど。。。

ただ、子供が事件を起こすと「親の顔が見たい」と言いますが、大体は「(母)親の顔が見たい」なのではないでしょうか。問題が起こったときには必ず「母親」のありかたを問われるのは、やはり子供を産んだのが母親だからでしょうか。

「親はなくても子は育つ」という言葉もありますが、変な言い方ですが「個体差」も理由の1つでないかという気がしてなりません。「育て方」「育ち方」は千差万別で、それこそ親の数だけ違うと思います。

キレる子供は母親のせいだと言わんばかりの意見を聞いた事がありますが、そもそも親もパーフェクトな人間ではないので、「育てる」「教育する」というより「育つ」のを「手助けする」で十分じゃないのかと最近では思ってしまうのです。

## 母親を動物に学ぶと

投稿日 1999年9月22日(水)09時07分

投稿者 赤沼侃史 [G15158.dion.ne.jp]

カヲルさんのMSGにもっとRESPONSEが有るかと思い見守っていました。

子育てには色々な意見があります。それらは其れを主張する人たちの主観的な意見であり、客観的な裏打ちは有りません。

そこで、**母親の役割**を動物から学ぶことは客観性を持たず一つの方法だと思っています。

その根拠の一つは2, 3歳までの母親と子供との関係は動物の親子関係とほとんど同じであること、人間も進化の流れの頂点にあるだけであり、動物に共通する物はきっと人間にも有るだろうと言う、仮定です。

そして医学ではこの仮定が暗黙の了解の上に、成り立って現在に至っています。心にも其れが成立するとして、以下の母親の役割を2, 3歳までの子供に限定して述べてみます。

ハリー・ハーロウという人が1950年代に赤毛猿を用いて、多くの実験を行い、当時のアメリカで話題になったそうです。それ以後この実験を根拠に子育てを考えている人を見かけません。その実験は膨大で、ここでは述べられませんが、その結果を箇条書きにしてみます。

1. 母親は100%母性があり、母性が発揮できないときは何か原因がある。
2. 母親は子供にとって安全の場所であり、母親は子供に知識を与える場所ではないこと。
3. 母親の元に安全な場所があれば、子供は自然と知識を求め、社会性を獲得していくこと。
4. 母親の元に安全な場所が無ければ、子供は精神症状に相当する物を表して、社会が出来なくなる。
5. 子供は母親を無条件に信頼している。母親はその信頼に無条件に答えているだけである。

これらは2, 3歳以後の子育てにも大きな示唆を与えていると思います。

## 安全の意味とは。。。

投稿日 1999年9月22日(水)12時30分

投稿者 カヲル [kasm1DS11.iba.mesh.ad.jp]

具体的に「安全」とは生命の安全と精神的な安心ということでしょうか。

私の場合は極めて主観的であり、客観的で無いかもしれませんが、最初の「母親は100%母性があり。。。」の部分ですが、この「母性神話」に苦しむ母親が多いのです。

実際、夜泣きばかりする子を放り投げたいと思った、という母親が多数います。母親だからどんなにしんどい時でも我慢するのが当たり前、やりたい事があっても子供を犠牲にしてまでやるべきではない、という声を聞くと、「果してそうなんだろうか？」と疑問に思う事もあります。

赤沼さんがおっしゃる「母性」とは意味が違うかも知れません。が「子供が求める物を与えるのが母性」だとすれば、愛情だけでなく物質的な物も求めるのが子供です。

あれが欲しいこれが欲しいと欲望には限りがありません。スーパーで駄々をこねられて、いくら言っても泣き叫ぶとすれば、母親は体罰を与える事もあります。

子供は天使ではないし、誰かが書いてましたが「犬よりタチが悪い」もうなずけます。実際に現場で育児をしている者としては「育児はキレイごとではない」のが実感です。

でも赤沼さんのような客観的な見方も必要ですが。。。

あと、お聞きしたいのですが、[母親がいない子供はどうなんでしょうか](#)。

極論ですが、きちんと育たないという事は決してないと思うのですが。。私は学術的な理論もわからないし、実際の経験から話しているだけですから「わかってない」とお思いになられるでしょうが、よろしかったら教えて下さい。

## カヲルさんへの返事です。

投稿日 1999年9月22日(水)16時05分

投稿者 赤沼侃史 [E140164.dion.ne.jp]

あくまでも2, 3歳までのまだ動物に近い状態の子供についての議論です。それ以上の年齢については主観的要素が大きいため、また別の機会にさせて下さい。

「安全」とは**生命の安全**です。この年齢までの生命の安全は脳科学から言うなら、情動＝心の安定と同じ意味になります。

夜泣きが何を意味するのか、分かりません。多くの母親は子供の夜泣きの原因を見つけて子供を寝かしつけようとします。其れは母性の現れでもあり、疲れている母親のためにもなります。「実際、夜泣きばかりする子を放り投げたいと思った、という母親が多数います。」間違いなく事実だと思います。

ただ、母親は最初から子供を放り投げたいと思うわけではありません。いろいろと手を尽くしても解決しないから、その他の外からの圧力が有るから、色々な自分の都合が有るから、その様な気持ちになるのであり、私に言わせればその様に思うようになる母親は何か原因は分からないが、あることの被害者であり、母親が悪いわけではないと思うのです。

多くの母親がそれでも耐えられるのは優しい母性がまだ強く存在している証拠だと思います。あくまでも私の意見です。

それから私の経験ですが、普段夜泣きをしない子供が夜泣きをして、困り果てた母親が私の診療所を尋ねてくることがあります。その時解熱剤の座薬を入れてやりますと、まもなく赤ちゃんは落ち着いて眠ってしまうことが多いです。

夜泣きの中には赤ちゃんが体調が悪くて辛いと言っている場合もあるのかも知れません。「母親がいない子供はどうなんでしょうか。」その答えは前述のハリーハーロウの代理母の実験が答えを言っています。

子供が母親として愛する物は、柔らかくて、暖かくて、ゆっくりと揺れる物です。母親の肌が其れに一番適していますが、人形でも十分なことは実験が示しています。この条件を満足できれば、子供の心は落ち着いて、恐怖も克服できます。

ここでもう一度夜泣きに戻ります。例えばゆりかごのような物に赤ちゃんを入れてゆっくりと揺すっておけば、母親がだっこをしていると同じ様な効果が得られるわけですから、その分母親が楽になります。「母親だからどんなにしんどい時でも我慢するのが当たり前、やりたい事があっても子供を犠牲にしてまでやるべきではない」一般に母性が働いていますと、他の人が見てしんどそうに見えるときでもさほど負担になっていない事が多いと思います。けっこうできてしまうものではないでしょうか？

この点は私の勝手な観察です。所でしんどい時とは、母性で処理できる範囲以上の負担がかかるときと、何かの理由で母性の発現が阻害されている場合があると、私は推定しています。

その内前者の場合はほとんどなく、多くは後者であり、そのために、母親がしんどいと思うような状態に追い込む環境を考えなくては成らないと私は感じています。やりたいことについても、環境が母性を押さえつけて母親をそちらに走らせているのではないかと感じています。

それでは母親に問題解決法が無いかと言いますと、それもハリーハーロウの猿の実験が答えを出してくれています。一時期子供を苦しめても、その後十二分の母親と子供とのスキンシップが有れば、子供は全てを許してくれる、ストレスには成らないで解消されると言うことを示す実験があります。

私の答えとしては、母親がやりたければ好きなことをやっても良い。ただしその後十分に子供との接触を持つことを忘れないで欲しいと言う結論です。長くなったので中断します。

## あくまで経験上ですが。

投稿日 1999年9月22日(水)18時12分

投稿者 カラル [kasm1DS08.iba.mesh.ad.jp]

お答えいただきありがとうございます。夜泣き関連ですが、「ゆりかごのような物」に入れてもうちの場合は駄目でした。他に理由があったのかもしれませんがね。

あと「他人から見てしんどそうに見えても母性が働くとさほど負担にならないのでは」というのは、「生き物を扱っている」のだから、他の家事と違って後回しにすることができない、という理由からなので、確かにできてしまう、というか、やらざるを得ないので。

ですから、知らない間に疲れがたまってしまう。ここは赤沼さんの推定でしょうから、あえて本音を書かせていただきました。小さな子を育てる際の「父親」の重要性はどのようなものでしょうか。

母性などろくにないと思っている私が、睡眠3時間弱で

「放り投げたい」と思いながらもそれをせずに乗切れたのは、夫の協力があってからだと思っているので、父親の重要性についても機会があれば教えて下さい。

## 続けます。

投稿日 1999年9月22日(水)19時53分

投稿者 赤沼侃史 [G13020.dion.ne.jp]

仕事のあいまに書いています。既にカラルさんからRESがあり、それにも私なりに触れておきますが、まず前回の続きを処理してしまいます。

子供に物を与える問題があります。御指摘の問題は2,3歳を越えた子供の状態ですので、動物から学ぶわけにはいきません。ただ、2,3歳までに子供に物を与える事がその後の物を欲しがることに大きな影響を与える可能性が高いので、その立場から触れておきます。

動物は、子供が欲しがる物しか与えません。其れは人間に近い類人猿でもそうです。しかし現代の大人は赤ちゃんが可愛いと言う理由で物と愛情を与え続けています。決して子供が欲しいと言っていないのに与え続けます。

そして子供が成長して欲しいと言い出したときに、其れを拒否します。それを欲求不満性無報酬と言います。

子供には恐怖として作用し、回避行動をとらせます。つまり、「愛情だけでなく物質的な物も求めるのが子供」は求めるようになる前の愛情や物質に満たされた生活に原因が有る(これは断言できると思います。)のであり、子供には原因が無いと思います。

母性とは子供の要求する物を無条件に与える物ですが、言葉をしゃべらない、しゃべれても自分の意志を言えない、また、意志とは分からない、子供に何をどれだけ与えればよいかは、大変に難しいです。

言葉をしゃべれてもしゃべれなくても、子供の心を正しく表現しているのは、脳科学が

ら言うと表情と行動と症状です。それらで欲しいと表現している物は与えるべきでしょう。与えられないときには、其れに変わる物、母親、または其れに変わりうるものとのふれあいを十二分に与えてあげることが、大切です。

そしてそれは欲求不満性無報酬を解決するためにも大切な方法だと思います。

再度夜泣きの問題です。申し上げましたように動物からこの問題を学べません。私の子育ての経験、医者として対応した経験だけですから、それ以外の例も有ることをお許し下さい。もっと夜泣きの科学的な研究がなされれば良いのですが、難しいところが多いことが推定されます。

「知らない間に疲れがたまってしまう。」実感だと思います。それでも耐えられるのは一つの母性の現れの可能性が有ります。

単にやらざるを得ない=義務感、それもあるでしょう。それも単に義務感ばかりでなく、子供が可愛いからではないでしょうか？まあ、男性から見れば母親の生命力はすごい、とても真似のできないものです。

子育てに父親の関与は、動物を見る限りあてになりません。中には雄が子育てをする動物もいます。母性に相当する父性が無いわけでもないのですが、当てにならないと言うところでしょう。

猿の観察でも老いた雄猿が母親の居ない子猿の面倒を見ていたという報道もあります。人間の場合それは夫婦間の問題であり、原則はないようです。

母性とは何かを決めるのは難しいです。でも有るから自然淘汰をされないで動物が生き残っています。

人間の場合動物で言う母性が無くても、知識で補うことができます。その補うことが出来るという点も母性とも解釈できるかも知れません。母性を口で言うのは簡単ですが、人間の場合規定するのは難しいです。